

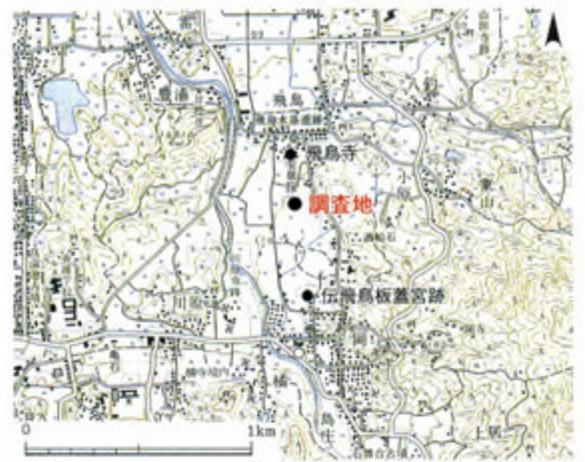
飛鳥京跡第164次調査

— 外郭北部の調査 —

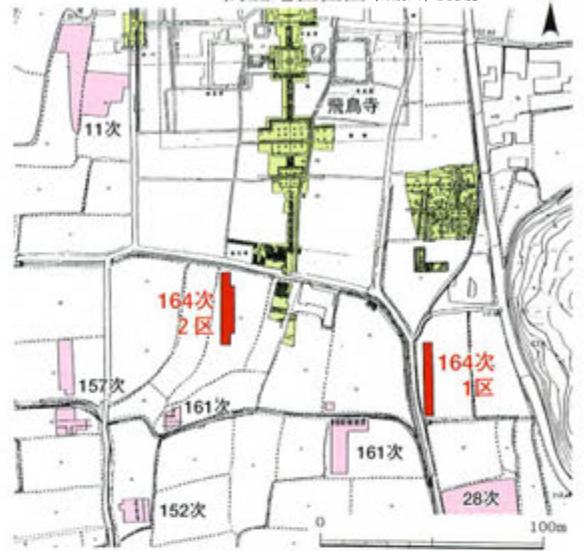




2区全景 石敷広場と石組溝（北から）



調査地位置図 「国土地理院発行 1/25,000 地形図 (畷傍山) を使用」



調査区配置図 (■ 当研究所調査、■ 奈良研調査)
飛鳥京発掘調査位置図



2区 石敷広場から甘樫丘を望む（南東から）



1区全景 石組溝と掘立柱塀 (南から)



1区 掘立柱塀の柱穴 (西から)



1区 下層の石列と縞状の整地土 (西から)



1区 東西方向の石組溝 (西から)

はじめに

飛鳥京跡は奈良県高市郡明日香村に所在する宮殿遺跡です。これまでの調査によって3時期にわたる宮殿の遺構が確認され、これを下層からⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期と呼んでいます。Ⅰ期は舒明天皇の飛鳥岡本宮(630年～)、Ⅱ期は皇極天皇の飛鳥板蓋宮(643年～)、Ⅲ期は齊明天智天皇の後飛鳥岡本宮(656年～)と天武・持統天皇の飛鳥浄御原宮(672年～)の可能性が考えられています。

飛鳥京跡ではこれまで内郭やエビノコ郭・苑池遺構などその南半を中心に調査がおこなわれてきましたが、近年は外郭北部地域を重点的に調査しています。

今回の調査は、飛鳥京跡の北限ないしは、北部地域の様相を明らかにすることを目的としています。そこで内郭から北へ約400m、現在の飛鳥寺から南へ約150mの地点2ヶ所を発掘しました。1区は飛鳥寺の南東に位置しており、第161次調査で掘立柱建物を検出した調査区の北東にあたります。2区は飛鳥寺の南に位置し、第161次調査で東西方向の石組溝を検出した調査区の北東にあたります。

調査の成果

1区の南端では、幅3m・深さ80cmの東西方向の石組溝を検出しました。南壁は30～40cm程度の石を3段に積み上げています。北壁は藤原宮期に壊されており、側石は2段分のみが残っていました。溝の中からは土師器や須恵器など大量の遺物が出土しました。出土した土器から7世紀末に溝は埋まったとみられます。この石組溝は、これまで飛鳥京跡で確認された中では最大のものであり、基幹水路のひとつと考えられます。

また、飛鳥寺南の石敷広場の東端を南北に走る石組溝の延長を1区北西で確認しました。調査区の中央では掘立柱塀が検出されました。一辺1.4mの柱穴が2.7m間隔で南北に5間分並んでいますが、柱は全て抜き取られています。

掘立柱塀を検出した面の下層において、南北方向の石列を確認しました。出土した土器から飛鳥時代前半のものと考えられます。掘立柱塀はこれら

下層の遺構を整地して埋めたあとにつくられています。

2区では、奈良文化財研究所が昭和31年から32年にかけて調査をおこない、その存在が明らかになった飛鳥寺南の石敷広場の一部を検出しました。石敷広場は約30cmの扁平な石を敷き詰めたもので、その南端には幅80cmのテラス面が一段下がってつくられています。テラス面の南縁に沿って、幅90cm・深さ30cmの東西方向の石組溝があり、溝の底には20cm大の石が敷かれています。

東西石組溝の南には幅60cm・深さ10cmの断面U字状の南北石組溝が取り付いています。南北石組溝は北端から約7m南で東へ直角に曲がっています。溝の西と南には約30cmの石を立てて側石としていますが、東と北には側石は認められません。石敷広場と同じ方位であることから、飛鳥寺に関連するものと考えられます。

2区南では、下端幅7m・上端幅4m・高さ40cmをはかる東西方向の土手状の高まりが存在し、その南側に砂利敷の広がることがわかりました。

まとめ

飛鳥京跡における最大の基幹水路と飛鳥寺南の石敷広場を検出し、新たに石敷広場にともなう付属施設を確認しました。飛鳥京跡外郭北部の状況は徐々に明らかになりつつあります。しかしながら、これまで発掘調査がおこなわれたのはごく一部の範囲であり、さらに詳しい様相の解明は今後の調査に委ねられます。

なお、今回の調査は、世界遺産登録に向けた「世界遺産登録推進事業」の一環です。

(東影 悠・佐藤麻子)

飛鳥京跡第164次調査

—外郭北部の調査— 現地説明会資料

2010年2月14日

奈良県立橿原考古学研究所

〒634-0065

奈良県橿原市畝傍町1番地

Tel. 0744-24-1101

<http://www.kashikoken.jp/>

(ホームページでも現地説明会の案内・説明内容をご覧いただけます)



せんたくん
平成22年1300年祭
©Heijo-kyo 1300th Anniv.